

## 高校生球児の野球留学とキャリア形成の諸課題

竹内一郎・高橋義雄

### High School Students' Transference for Baseball and the Issues of Their Career Development

TAKEUCHI Ichiro and TAKAHASHI Yoshio

#### はじめに

2005年夏、甲子園球場でおこなわれた高等学校野球選手権の開会式で、文部科学大臣が、高校生の野球留学に対して苦言を呈した。高等学校野球大会を主催する日本高等学校野球連盟は、野球留学の実態調査を実施し、「特待制度や中学生選手への勧誘行為に行きすぎた点が見られる」など、野球の技能を活かして他府県に多くの生徒が進学している実態を報告した<sup>1</sup>。また2006年以降も実態調査を継続することや、地方大会申込書の選手名簿に出身中学と中学の都道府県名を書き加えるように求めることを決めた。

日本高等学校野球連盟は、「入学金や寮費の免除」、「勧誘のための中学生の自宅への訪問」など、学生野球憲章に反することを野球留学理由にあげる。しかしこれが本当に非難されるべき行為となるかは議論の余地がある。例えば、一芸入試のように自分の特技を生かして有利な進学をすることや、チームを強くするために高校関係者が部活動の方針について説いて回ることを一概にいけない行為とすることは困難であり、キャリア形成の手段のひとつである野球の技能を活かすための県外留学には賛否両論がある<sup>2</sup>。

いっぽうで日本高等学校体育連盟に加盟するそのほかのスポーツ競技には県外留学を制限する規定はない。実際、青森山田高等学校普通科体育コースに進学し、実質的に中国で活動して活躍している卓球の福原愛選手の例もある。その点では、高校野球が生徒や指導者の自由に制限をかける競技であるとも考えられる。

日本高等学校野球連盟が理由にあげる学生野球憲章は、戦前の野球熱が昂じて教育の妨げになった背景から出された野球統制令を1947年に廃止する代わりに戦後、学生野球組織側から提示された内部規定に位置づけられる。しかし制度運用自体が目的化し、社会の変化に即して学生野球のありかたや学生野球憲章自体の見直しが議論の中心にはなっていない。

野球留学の問題は、5つの立場からの見方がある。まず野球選手（生徒）当事者、次に学校経営者、そして地元の高校野球ファンや野球指導者、さらに日本高等学校野球連盟や新聞社などの大会主催者、最後にプロ野球やアマチュア野球連盟で選手を育成する立場である。

はじめに甲子園出場を夢みて幼少から野球を続けてきた生徒たちの視点でいえば、野球留学は夢の実現のために「15歳で親元を離れて」留学する決断である。留学者を多く出している大阪府や神奈川県では、実力が多少劣る生徒にとって、他府県への高校留学は甲子園出場のための手段である。竹内のフィールドワークでは、東北地方の高校野球のレベルは大阪府や神奈川県に比べてかなり劣っていることが感じられた。このことは東北地方が甲子園出場のための競争・競合相手が少ないことを意味し、留学者が野球の技能レベルが低い土地でチャンスをつかもうと考えるのは合理的判断でもある。最近では技能レベルの低い選手だけでなく、中学生の段階で全国的に注目されるトップクラスの選手が野球留学する例も増えている。トップクラスの生徒の場合、プロ野球を始め次の進路のために、甲子園に出場し、早くから注目をされることなどが、自分のキャリア形成でプラスに働くことを彼らは理解しているのである。次に、学校経営者は学校のPRにもなる甲子園出場のためには優秀な生徒を全国から募集したいという思惑が働く。

反対に、地元の高校野球ファンや野球指導者は、地元出身者がいない地元の県代表チームなど興味がわかず応援に熱が入らない。また他府県の野球技術の高い生徒を連れてきて試合に勝たれては自分たちの庭をあらされた気持ちにもなる。

そして主催者は、地元の応援や人気がなければ地方予選や甲子園大会の入場者数や、新聞の売上に影響することもあり、ファンの興味を減退させる野球留学を押しとどめたい方向に力が作用する。例えば、NHK番組「クローズアップ現代」では、野球留学の背後に「ブローカー」が存在するという黒い世界を示唆した報道がなされ、否定的なイメージを出して放送されている<sup>1)</sup>。

最後にプロ野球関係者は、プロとアマチュアの垣根が高いこともありメディアを通じた発言は目立たず見守っている状

況である。

本研究では、竹内<sup>3</sup>と高橋<sup>2</sup>の高等学校野球部監督としてのフィールドワークをもとに、現在の高校野球を通じた高校生のキャリア形成の諸課題について報告する。

## I. 高校野球の魅力・仕組み・興行的側面

夏の甲子園大会は8月のお盆の時期に実施される。お盆と正月は、里帰りや墓参りなど日本人にとって、1年に1回だけ故郷やそのルーツについて再認識する期間でもある。「郷土の代表」が甲子園に集い、戦いを広げる甲子園大会は、アイデンティティを醸成するのにタイムリーな祭典となる。そして観戦者やテレビ視聴者は、「青春」や「汗と涙の高校野球」というメディアに味付けされた世界が加わり、日常の煩わしさを忘れノスタルジックな気分になる。

高校野球では、原則的に各県代表として1校が地方予選を勝ち抜き甲子園大会に出場する。しかし選挙における1票の格差同様、都道府県による甲子園出場の格差が存在する。2004（平成16）年度の資料では、大阪府の登録部員が8197名に対し鳥取県は894名である。単純に各県1代表校18名しか甲子園に出場できないため、大阪府の生徒が鳥取県に留学すれば甲子園に出る確率は約10倍になる。甲子園のお膝元の大阪府で育った野球少年が、憧れの甲子園出場を夢みて、地方の学校への進学を選択するのは単純に確率で言えば合理的である。

高校野球を主催する新聞社、テレビメディアはその歴史的経緯もあり、人気スポーツを興行として維持していくことが必要である<sup>4</sup>。高校野球の人気の秘密は「汗と涙の高校野球」という言葉に集約されるイメージ戦略にある。しかし野球の上手な子どもを別の地域から集めてきて、努力せず地元の大会を勝ち抜いてしまうイメージのある「野球留学」は、「郷土の代表」というキーワードに疑いをもたせ、非常に合理的で、商業的であり、大人の思惑の影が漂い、清潔な高校野球のイメージを台無しにする。

高校野球は、メディアの価値が高いために多くのビジネスに利用されている。主催者とそのブランド価値を維持してきたことによって、ビジネスとして利用する者にとって甲子園の高校野球は使い勝手の良いブランドイメージであり、ビジネスに利用される。冷静な目で見れば高校生の野球大会にすぎない高校野球で、主催者は地方予選から「高校野球は〇〇新聞！」と謳ったテレビCMを放送して販売促進を狙っている。

## II. 私立高等学校経営と野球部

現在、少子化によって地方都市の私学経営は危機的状況にある。短期間で即効性のある対処を実施し、生徒を集めなければ破綻する可能性のある学校も少なくない<sup>5</sup>。フィールドワークをしてみると、実際はそんなに単純ではないが<sup>3</sup>、神奈川県桐蔭学園高等学校や和歌山県の智弁和歌山高等学校のように、スポーツ特に野球を利用して学校の知名度を高める手法は未だ有効と考えられている。

また最近では女子高が共学化する際に、その象徴として野球部を特別に強化し、成功する事例が増えている。石川県の遊学館高等学校、愛媛県の済美高等学校、鹿児島県の神村学園高等学校などである。こうした学校は、数千万円掛けて野球部を強化しても、甲子園に出場して新聞やテレビに露出されることで、長い眼で見れば野球部関連の投資は高いものとはならない。つまり全国放送のNHKに2時間30分映り、地方予選では毎試合地元新聞に記事が掲載されることで目的は達せられる。そのため野球部が地方大会を勝ち抜いて、甲子園大会に出場することは高等学校経営で有効な手段のひとつと見なされている。

そのため、例えば東北の高校野球で知名度の高い仙台育英高等学校は甲子園球場よりも大きな野球場、室内練習場、野球部員のための寮などをそろえている。そのほか東北高等学校、青森山田高等学校、光星学院高等学校などは野球の技能がトップクラスの中学生が十分に野球をすることができる施設設備、授業カリキュラムを備えている。

学校経営者が短期間で甲子園出場の目標を果たすためには、中学生時代から硬式野球のクラブチームで鍛えられた選手たちを迎え入れるのは当然の選択である。クラブチームはその特性から数多くの全国規模の大会、地方の招待大会に参加している。従って他県間の交流やさらには外国との交流も盛んにおこなわれ、地方の私学の野球部情報がクラブチームの指導者に入ってくる構造になっている。

筆者である竹内が監督として関係した山形県の羽黒高等学校は、人口9000人程度の過疎の町にある私立高校で、赴任した年は入学者が定員の80%を切っていた。しかし甲子園に出場した年の入試では、定員の130%の入学者があり、また定員割れしていた学校を6年連続定員確保させたことでも評価されている。高校生において野球の技能や競技成績は大学進学や企業への就職、さらにプロ野球への入団など、進路実績にもつながる。竹内が指導した生徒のなかには、大学進学をはじめ、プロ野球や社会人野球で活躍する生徒もいる。

高校野球部の監督は、学校経営の重要な戦略になった場合、契約による学校職員という形での採用がある。竹内の場合、野球部の監督だけではなく広報室に籍を置き、学校全体の生徒募集の仕掛けについても任された。そこで野球部での成果を学校経営にプラスになるよう常にリンクさせた戦略を実施した。例えば、竹内が「東京大学出身で学習塾を経営する監督」であったので、羽黒高等学校の特進科のアドバイザーとして大手予備校と提携し、東京大学合格を目指した。またブラジルからの野球留学生を受け入れたため、同校の国際科が山形県庁国際室と協力し、英語圏以外の国々との交換留学を推進した。こうした野球を核にした羽黒高等学校の経営は、イメージ戦略としては成功したと考えられる。学校側は竹内を雇用した経費として、竹内の生活費をすべて負担し、また野球部に関わる費用も数百万の単位で竹内自身が自由に使うことが可能な仕組みを整えていた。個人的な収入で言えば、甲子園に出場した年は高校野球の監督としては破格なものであったと推測される。

### Ⅲ. 野球のキャリア形成と外国人留学生

近年、特色をだす目的でスポーツ科や国際科などを設置する高等学校もある。新設の高等学校にとって、部活動で活躍し全国的な知名度をあげることは定員充足にも影響を与える。そのためには、国際交流や国際親善の目的で受け入れている外国人留学生も運動能力の高い留学生を入学させ、試合に出場させることもひとつの手段として考えられる<sup>4)</sup>。

野球技能をキャリア形成に利用する場合、プロ野球選手になることがひとつのゴールとなる。日本のプロ野球では、日本の学校を卒業した外国籍の選手は卒業すると国籍に関わらず日本人扱いにされるため、外国人が日本のプロ野球選手をめざす場合は日本の学校に在籍することが合理的な選択肢のひとつになる。例えば、2005年のドラフト会議で日本ハムに1位指名された福岡第一高校の台湾からの留学生の陽仲寿は、日本のプロ野球独特の外国人枠とは関係なく、外国籍のまま日本人枠でプレイすることができる。そのため受け入れる学校があれば、日本でプレイしたい野球少年たちは世界中にいる。特に母国にプロ野球の組織がない国では、野球少年はチャンス求めて日本に留学する。例えば具体的な事例として、竹内が受入を担当したブラジルからの留学生について述べたい。

ブラジルはサッカー王国であると認識されがちであるが、野球においても人材を輩出している。ボーイズリーグニュース1999年9月号の1面には、ボーイズリーグの世界選手権で、ジャパン関西チームがブラジルチームを7対5で破り6連覇を達成した記事がカラー写真とともに出ている。ブラジルは予選B組で台湾と引き分けたもののメキシコ、アメリカ、韓国を始め東西の日本選抜チームを撃破し、5勝1分で予選1位となっている。特徴的なのは、ブラジルチームの選手リストに日系人らしき名前が多くみられる。(表1)表1の選手のなかには、日本の大学やプロ野球で野球を続けている選手もいる。

ブラジルには、戦前移住した日系人社会<sup>5)</sup>があり、日系人社会において野球は母国の球技として扱われている。日系人がブラジルで野球を始めたのは1916年9月、1920年には日本人の初めての野球チーム「ミカド運動倶楽部」が設立されている。日本人のブラジル移住が始まってから10年後のことである。野球場は、現地の日系企業ヤクルトが地域貢献のために出資してできたベースボールアカデミーがあり、そこで子どもたちは野球を習うことができる。ちなみにドミニカにあるプロ野球選手養成機関である「広島カープアカデミー」とは異なり、ヤクルトスワローズとの直接的な関係はない。しかしヤクルトの関連企業として、年に1度程度、ヤクルトスワローズのスタッフが臨時のコーチとして選手を指導している。

現在、ブラジルの野球人口は1万5千ほどで、その3割が非日系人である。しかし日本のボーイズリーグに相当する中学生のクラブチームはあるものの、高校野球、大学野球といったものはほとんど存在しないため、中学を出たら日本でプレイするくらいしか本格的に野球を続ける道がないのが現状である。そのため竹内が在籍した山形県の羽黒高等学校や宮崎県の日章学園高等学校などが窓口の存在となり留学生を受け入れた。ブラジル留学生の活躍で羽黒高等学校は甲子園出場を果たし、日章学園高等学校に留学した生徒のなかにはプロ野球選手になるものもいた。

1番	投・遊	ニシムラ
2番	左・一	ツツイ
3番	右	トミタ
4番	捕	カタヤマ
5番	中	ロチャ
6番	一	クドー
	走	ナガタ
	左・投	カルディエラ
7番	遊・二	アダチ
8番	指	サトウ
9番	三	ヨネクラ
	走	ラビソト
	二	ムラカミ
	投	ヨシムラ
	左	クサノ

表1 ブラジル代表チームのメンバー表

#### IV. 野球によるキャリア形成の構造と課題

野球によるキャリア形成とは、子どもから野球を続けることで野球の技能を利用し推薦で高校や大学進学を果たし、究極的には一流企業に就職、プロ野球選手としてのキャリアをつくることである。野球によるキャリア形成は、プロ野球選手を夢みる子どもや保護者がおり、そして中学生、高校生年代でそれぞれ注目をあびるステージが用意され、高等学校や大学からは学校経営の手段として用いられ、さらに企業が都市対抗野球の選手を募ることで、これまで野球をすることで一流企業へ就職する経路が確立されてきた。

こうしたキャリア形成のパイプは、大学野球部OBのネットワークがしっかりと根づいて社会人野球関係者や高校野球指導者におよび、そして中学生や小学生の指導者が高校野球指導者とパイプを組むことでネットワーク化されている。しかしいっぽうで既存の野球人脈の閉鎖性がキャリア形成における問題点にもなっている。

この野球人脈によるキャリア・パスの閉鎖性は、日本学生野球協会の不祥事による処分を分析することで明らかにすることができる。近年、学生野球での不祥事が公表され、メディアに掲載されることがあるが、これは急に増えたわけではない。近年の動向は名門といわれる学校の不祥事情報が漏れ、出場停止などの処分を受けたことで、今まで表に出にくかったものが、一気に噴出したと考えられる。日本高等学校野球連盟は以前から高校野球の世界にはびこる暴力やいじめの問題に対し、出場停止などの見せしめ的に処分を下すことによって、排除しようとしてきた。しかしその根は深く、構造的な問題を解決しないと改善されないと考える。まず高校野球の指導現場での暴力は、指導者自身が暴力を受けて育っており、立場が変わってもその問題点が理解されない再生産の構造にある。そして暴力はそれを見た選手たちが進学し、指導者として現場に戻ることで受け継がれ、延々と続く構造となる。

さらに高校野球のキャリア・パスの構造が自浄作用の働かせない仕組みをつくる。例えば、監督からまたは先輩から暴力を受けた場合、彼はまず、このチームでプレイを続けるために誰かに相談する。しかし、あまりに大きな声を出して解決に動こうとすると、外部に暴力沙汰の情報が漏れて、改善を求めた行動は結果的にチームの出場停止へとつながり自分への不利益となってふりかかる。そのため当事者は学校内での解決をあきらめて、他のチームへの転校を考える。しかし高校野球では転校後1年間は公式戦に出場できない仕組みがあり、高校野球に復帰するならば、できるだけ早く退学した方が良いと考え、高校1年生の途中で退学・転校しようとする。しかし事実上、高校1年の途中で退学した場合、修得単位が全く認められないので、改めて再入学するしかない。いじめ等を理由とした退学、転校の場合は、特例措置として単位が認められることがあるが、特例措置を利用すると、退学した高等学校の野球部が処分の対象となるので、当事者にとって利用するのは極めて勇気が必要となる。そこで、高校2年の4月からの転校が最短となるが、高校野球の規則により、1年間試合に出場できないため、高校3年の4月に出場が可能になっても、7月の夏の大会までわずか3ヶ月しか高校野球をすることはできない。つまり転校しても3ヶ月しか活動させないことで、その費用的、精神的な労力を考えれば転校を押しとどめる仕組みとなっている。

さらに高校野球の活動を断念した場合、彼らを受け入れる硬式野球の社会人クラブが少ない<sup>6)</sup>。ほかにも大学野球部で野球を再開することも考えられるが、前述した高校野球指導者と大学野球指導者のネットワークによって、高校野球部の出身者でないものが所属できるトップクラスの大学野球部などほとんど存在せず、野球同好会などのサークル活動に収まってしまうリスクがある。野球の技能を利用した野球によるキャリア・パスを考える場合、大学野球部のあり方も今後の課題の一つである。

世間的には知られていないが、野球で名門といわれる大学野球部は、すべての選手に門戸が開かれているわけではない。各大学野球部は名目上毎年夏に高校生対象のセレクションを行い、そこで推薦を受ける選手を決定する。そのセレクションに選ばれない生徒は入試に合格して入学しても入部が認められないケースや、認められても1軍の指導者が指導しない3軍、4軍といった補欠の部員として4年間を過ごさねばならない。さらに野球の世界にも学閥があり、大学の監督も大学野球部の学閥関係を、長期にわたり継続されている場合も多く、大学進学も学閥ネットワークという縁（パイプ）のある高等学校から大学へと繋がっているケースがある。縁（パイプ）がない優秀な生徒がセレクションに参加した場合、その実力が明らかに他より優れていない限り、その縁（パイプ）のある選手を差し置いて選ばれることが難しい。

このような野球界の特殊なパイプラインによって、運悪く自分に合わない高等学校の野球部に入った場合、犯罪まがいの暴力が行われても、我慢するしか野球の技能によるキャリア形成が達成されず、我慢しなければ野球によるキャリア形成を諦めることになる。このことは、日本の野球少年たちがセカンドチャンスのない野球界の仕組みの中にいることを示しており、高校野球がトーナメント制で一度負けてしまえば引退が待ち受けているように、高校野球に足を入れた瞬間に、一度挫折してリタイヤすると、二度とチャンスはない極めてリスクの高いキャリア形成と考えることができる。

近年、唯一のセカンドチャンスと考えられるのは、アメリカでプレイするという道である。日本の学校制度を経ずにア

アメリカのメジャーリーガーになったマック鈴木の場合がその好例である<sup>7)</sup>。しかし鈴木(2005)<sup>6)</sup>は「日本のアマチュア野球界には「不正な金銭の授受を強要する『関係者』と称する人たちが存在し」、「領収書の発行できない金銭、すなわち裏金」を要求するために、「マネジメント料」や「育成報酬」といった正式な契約をしないと職務停止となるアメリカの大リーグのスカウトにとっては、日本の高校野球選手は能力が高くても獲得するにはリスクのある選手であると述べる。こうした高校生を取り巻く野球人脈によって彼らのアメリカ経由のキャリア形成も自由に選択できない仕組みが形成されている。

## V. 最後に

野球によるキャリア形成の閉鎖性を述べてきたが、野球界の問題点を反面教師的に利用したサッカーは、1993年のJリーグ発足以降、高校生年代のサッカー活動を高校サッカー部、もしくはクラブチームのユースチームを選択できる体制を構築している。高校生にとって選択可能性が増えることで自分にあった活動場所を得ることができる。この仕組みではサッカー留学が課題とされることはなく、現実には多くの生徒が県境を越えて自由に移動する。1936年に発足したプロ野球の歴史はサッカーのJリーグに比較して長く、その歴史の中で裏社会との問題、プロとアマチュアの関係断絶、そして学生側が自主的に商業化に対する拘束をかけるなど、野球でのキャリア形成という視点では自由度の低い仕組みを構築してきた。これまでの右肩上がりの社会経済状況においては、野球を通じて一流企業への道が開ける安定的なキャリア制度として機能してきたが、澤野(2005)<sup>7)</sup>が述べるように今日の企業を取り巻く環境の変化によって企業スポーツが崩壊した。そのため影響は野球にもおよび、娯楽が増加するという社会変化のなかでプロ野球を頂点としてキャリア形成をする学校経由の自由度のない仕組みに綻びが生じてきている。

いっぽう近年これまで述べてきた野球人脈のネットワークの問題点や綻びの修復を試みた、元西武ライオンズの石毛選手による四国独立リーグ創設、萩本欽一氏のクラブチーム設立の動きや、プロ野球とアマチュア野球界の関係修復、プロ野球制度の改革などがあるのも事実である。そして今後は高校野球、大学野球など学生野球のあり方についても、他のスポーツ競技を参考にして現在にあったスポーツと教育の仕組みづくりが求められると考えられる。

最後になるが、筆者らは、本研究はスポーツの社会的な研究であるのみならず、野球の技能をひとつの特殊技能であるとするならば、今日の教育社会学で取り上げられる若者の就職の議論<sup>8)</sup>においても文化・芸能におけるキャリア・パスの事例研究として新たな知見を提供できる可能性が示唆されると考えている。

## 〈注〉

- 1) 2005年10月24日放送のNHK「クローズアップ現代」や「ヨミウリウイークリー」2005年4月3日には野球留学の悪いイメージがメッセージとして埋め込まれている。
- 2) 高橋は、東京の私立開成高等学校硬式野球部の監督を1990年から1992年務めた。
- 3) 高等学校経営者は、甲子園出場がゴールではない。甲子園出場で獲得できる知名度によって受験者数や入学者数の増加と偏差値の上昇を狙う。学費の減免や施設・設備に投資を行い、甲子園出場の切符を手に入れても、すぐさま受験者数の増加に結びつくわけではない。甲子園出場が決まると地方では新聞の一面扱いされ、各種のマスコミに校名が露出され、その千載一遇のパブリシティのチャンスに学校のセールスポイントをうまくアピールすることが大事になる。アピールするものがない高等学校は単なる野球学校の烙印を押されてしまい、学校経営の核となる入学定員の確保はままならない。山口県の多々良学園高等学校のように総事業費約90億円をかけて、キャンパスを移転、校舎、講堂、寮、体育館、専用野球場、専用サッカー場など設備整備に投資をして資金繰りが悪化して民事再生法を申請した高等学校もある。
- 4) 横綱朝青龍、サッカー日本代表三都主はともに高知県の明德義塾高等学校を卒業している。高校生のバスケットボール大会では、長身のセネガルからの留学生が旋風を巻き起こしている。
- 5) 山形県人会が結成されており、竹内がブラジルと交渉をもつ窓口になったのはブラジルの山形県人会である。
- 6) 高校をいじめによって退学して、出場のできない期間、地域の社会人野球チームで活躍し、さらに才能で就職した社会人野球で開花させて、プロ野球選手となり活躍した選手に今関勝選手がいる。[http://www.koushinocoro.com/magazine/ma-20\\_02.htm](http://www.koushinocoro.com/magazine/ma-20_02.htm)
- 7) ロバート・ホワイトティング(1999)<sup>8)</sup>によれば、野球の才能に溢れた大阪出身の鈴木少年は、「典型的な“出る杭”」になった。15歳のとき、校庭で殴りあいの喧嘩をくりひろげ、学校当局と対立。チームからは追い出され、学校も自主退学している。

- 8) 本田由紀の『若者と仕事』(2005)や山田昌弘の『希望格差社会』(2004)など学校をパイプにしたキャリア形成について分析したものがあがるが、スポーツなどの特殊技能による若者のキャリア形成の視点が今後新たな知見を生むと考えられる。スポーツ産業研究分野では、飯田・五十嵐・高橋<sup>9</sup>が四国独立リーグの選手をヒアリング調査し、野球によるキャリア形成について発表している。

#### 〈参考文献〉

- 1 朝日新聞；高校「野球留学」調べたら916人－半数の選手大阪出身,2005年10月20日.
- 2 浜田昭八；球児の留学行き過ぎか,日本経済新聞,p.29,2005年8月15日.
- 3 竹内一郎；野球留学～羽黒高校甲子園初出場物語, [http://hoahoa.livedoor.biz/archives/cat\\_815576.html](http://hoahoa.livedoor.biz/archives/cat_815576.html)
- 4 有山輝雄；全国優勝野球大会の展開と新聞－メディアがつくった野球, 津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』pp.61-88, 同文館,1996.
- 5 全私学新聞；経営困難な学校法人への対応方針,文科省発表－私学の経営破綻を回避 “対応マニュアル”－, 2005年04月13日,1974号.
- 6 鈴木裕輔；MLBが付けた日本人選手の値段,pp.21-24, 講談社,2005.
- 7 澤野雅彦；企業スポーツの栄光と挫折,青弓社,2005.
- 8 ロバート・ホワイティング；日出づる国の奴隷野球, p.88, 1999.
- 9 飯田義明, 五十嵐恵美, 高橋義雄；IBLJ選手からみえる新たなキャリア選択－教育社会学的考察－, 日本スポーツ産業学会第14回大会号, p.15, 2005.